

アインシュタインは「相対性理論」(岩波文庫)のなかで、それまで物理学を支配していた「絶対静止空間」と「光エーテル」という概念を物理学的に持ちこむ必要がない、「すなわち、光は真空中を、光源の運動状態に無関係な、ひとつの定まった速度 c をもって伝播する」と言い、光速度不変の原理をしめし、すべてのものは光(秒速29万9792.458 km)より速く動くことができない、と言っている。

なぜ光速を超えられないのか、簡単に説明すると、アインシュタインには $E=mc^2$ という有名な公式がある。Eはエネルギー、mは質量、cは光速。

この公式を踏まえると、ある物質を加速させ、光速を超えさせようとすると、加速させるためにはその物質の後ろを押す大きなエネルギーが必要となる。エネルギーが増すと、それは同時に質量が増すことにもなる。するとまた、質量の増えた物質を加速させるためにはエネルギーはますます増えなければならぬ。そして、理論上、その物質を光速にするためには無限大の力が必要となるが、「無限大の力」というものは存在しないから物質は光速を超えることは理論上不可能だ、ということになる。(タキオンという超光速で飛び粒子を仮定して検出しようとしてみる)

では、なぜ光は光速になれるのか。それもまた $E=mc^2$ が証明している。物質のエネルギーはその物質の「質量」と「光速の二乗」を掛けたものである。ここで「質量」がゼロの物質があれば、エネルギーもゼロになる。エネルギーがゼロということは、加速させるために必要なエネルギーもゼロになる。物質が光速を超えられない理由は、無限大の力が必要だった、のだ。

シウム原子時計もナノ(10億分の1)の世界以下の正確さで測定されなければならないが、素人のぼくなど、そんな正確さが実現できることのほうに感心してしまうのだが。

で、どうした、という人がいるかもしれないが、もし、光速よりも速い物質が見つければ、アインシュタインの「過去へ電報を打つことができる」という戯れ言が実現することになるのだが、まあ、今のところはニュートリノ単位での1億分の6秒の世界である。そういうことにはならないにしても、物理学の基礎が変わることにはなる。まあ、物理の世界はこれから先もなにが待っているかわからないから楽しいのだが、たぶんそれらの一つも見ることなく死んでしまうのは残念なことだ。

そういう意味で死んでしまうのは残念なことだが、まあ、人間、不死なんてことはないし、それにこの歳まで生きていると、なんとも表現のできない「存在の欠落感」という煮ても焼いても食えないやっかいな無意識がもつそりと頭をもたげて、物理の真実がわかるうがわかるまいが、まあ、どうでもいい、というような気分になったりして、人はそれを「老年性ウツ」などというらしいが、ウツと欠落感は違うような気がするが、同じものだろうか。

ぼくの場合、福島泰樹のように「孤立無援の思想を生きよ」という覚悟も度胸もないから、その欠落の埋め合わせをその場の「言葉」にすがってなんとかやりくりしようとするのだが、「言語で現実を語ることはできないが、言語でしか現実を語ることはできない(ラカン)」という蟻地獄、メビウスの輪に閉じ込められてしまいうしかないのだろうか、と少々面倒くさ

が、質量がゼロならばその力が必要でなくなり、「質量のない光」は光速になれる、ことになる。(あくまでも理論上のことではあるが、100年間これが常識だった)

ところが、光速よりも速いニュートリノを観測した、という論文「OPERA検出器で測定したニュートリノ(neutrino中性微子)の速度」が9月23日、ネットサイトに投稿された。

ニュートリノとは、素粒子のうちの中性レプトンの名称で、宇宙を構成する基本粒子で質量をもつ粒子のなかで最も軽い粒子のことで、スイス・ジュネーブの欧州原子核研究機構の陽子加速器で陽子どうしを衝突させ、得たニュートリノを3年間にわたり、1万6千個を、732 km離れたイタリアのOPERA検出器に送ったところ、秒速約30万kmの光であれば約2.4ミリ秒(ミリは千分の1)かかることをニュートリノは1億分の6秒(60ナノ秒)だけ速く到着したという。ニュートリノの速度は光より10万分の2速いらしい。

とはいっても、ノーベル賞受賞者小柴昌俊のチームがスーパーカミオカンデでニュートリノの観測時に、超新星爆発で出た光とニュートリノがほぼ同時に観測されたこともあり、別の機関で検証されなければならない、という意見が多々あるようだ。しかし、OPERA研究陣は、ニュートリノの飛行時間を全地球測位システム(GPS)とセシウム原子時計を使って10ナノ秒未満で精密に測定し、測定距離の誤差も20cmと非常に小さい、それに、3年間にわたり、1万6千個の観測の結果で、信憑性は高い、としている。

しかし、1秒で地球を7周半する光よりも速いニュートリノをたった732 kmで測定したのだから、GPSもそうだが、セクもなつてくる昨今だ。だから「人間は本質的に他者との関係において言語的存在である(ラカン)」などと言われても、そんなことにとらわれることなく、生物は生物らしい(らしいとは何か、とまたこんがらがってしまうが)行く末をまっとうしたほうがいいのかもわからない、などとおもってしまう。こういうのを優柔不断だというのだろうか、きっと。

でも、そんなとき、「あらゆる生命の目標は死(フロイト)」にむかって日々を過ごしていることをゆるやかに承認している自分の姿が他者の肩越しにくっきりと見えたりして、「断念する術を心得れば人生も結構楽しい(フロイト)」という楽観をいつも外している自分に気づくのだが、それももう遅い。仏教には「一切皆苦」という言葉がある。すべての現象、すべての存在は、生まれ、そして、滅する。苦を受けいれ、執着せず生きる、そういうことを仏教は教えている。(こんなに簡単に書いたら仏教関係の人に怒られそうだが)

ガラス張りのビルに
映る空を見ている
流れる雲が

夕焼けに染まってゆくのを

古いフィルムのなかで

たしかめているような

遠い風の吹き方に

記憶をあずけている

思い出そうとしているのか

忘れようとしているのか
問うほどに失われてしまうものを
名づけようと試みる場所
重なり合う足音のなから
たったひとつの声をみつけるために
冬の空気にさらされる
陶器のような耳がある

ピルの影が濃くなつて
あまいな輪郭にとどまりながら
見上げる角度で
雲のゆくえを思っていると
うすむらさきの
幻のすきまから
だれかが
不意にわたしの名前を呼ぶ

転載したのは岩木誠一郎さんの詩集『流れる雲の速さで』(思潮社)のなかの「ヴィジョン」という作品の全篇。

すこしラカンの言葉を借りると、不完全な欲望の充足を求めざるを得ない人間は潜在的な神経症者であり、欲望の抑圧から自由になることができない、らしい。

ひとは無意識のなかに強い願望を持っている。(ラカンは抑圧と言っているが)自らが自らでありたい。わたしは何によつてわたしなのか。わたしはどんな他者によつて、他者はどんなわたしによつて支えられているのか。わたしは何ものでありた

か、と、ここもとなくも、ぼくはそうおもっている。

岩木さんに欠落しているもの、それは「名前のない馬」である。それは岩木さんの心のなかで、岩木さんによつて抑圧されているものの謂いである。しかし、それがなんなのか、だれも知ることはない。岩木さんも知ることはない。

だから岩木さんはこう書く。(「名前のない馬」全篇)

好きな動物は何か という質問に
馬 と答えたときから
すらりと四肢の伸びた生き物が
わたしのなかに棲みついている

電車に乗っているときも
街を歩いているときも
風にたてがみをなびかせながら
遠い物音に耳をすませている

夜が来て
だれかの絵のなかで見た風景が
濃い影をまとい現れると
天に向かつていなくなることもある

星空のどこかに
帰る場所があるのだろうか
愁いをおびた眼の奥には
夕日が燃え残っているのだが

いのか、何ものでもありたくないのか。わたしはだれかに愛されたい。

この「ヴィジョン」という詩のなかで岩木さんは思い出そうとしているのか、忘れようとしているのか、無意識の願望のなかでだれかに「わたしの名前」を呼ばれるのだが、名前を呼ばれた瞬間に「わたし」は「わたし」になるのだ。自らに猶予している「わたし」を「他者の声」によつて認識する。そのことで、岩木さんは他者との関係性において言語的存在になり得るのだとおもうのだが、「自己の現実」と「他者の現実」の合一にまでは至ることはない。

通り過ぎてしまった過去の声に引きずられている岩木さんは「欠落しているもの」に支えられて生きている。「問うほどに失われてしまうものを名づけようと試みる」のだが、それがかなうことはない。

ぼくたちは自分でも気づかず、心の幹になつていっているものをふと忘れてしまうことがある(ぼくなんかずうっと忘却したままだ)。

忘れてしまつても生きていける錯誤の時を持つときがある。その錯誤の時が過ぎ、ふたたび、心の幹にすがつて生きていかなければならなくなつたとき、その心の幹がどこにどう隠匿されているのか探しだせなくなつていく。探しだせないが、探しだせない心の幹、欠落したものの影によつてぼくたちの生は支えられている。自分では確固として認識できないもの、抑圧されたもの、無意識の領域に潜んでいるもの、それによつて、ぼくらは「欠落したもの」との共存を許されて、「不意にわたしの名前を呼ぶ」かもしれない道を歩んでいるのではないだろう

朝

カーテンを開けると

蹄のかたちをした雲がひとつ

ぽっかり浮かんでいることがある。

フロイトは人間の精神機能を「エス」「自我」「超自我」の相互作用としてとらえた。

「エス」は無意識領域で、本能的な欲望、生理的な衝動が支配している領域で、快楽を求め不快を避けるといふ「快感原則」に従っている。

「超自我」は善悪を判断して、良い行いをとる道徳心のようなもので、社会や他者に適応しようとする心の領域で、いわば社会のルールを守る倫理観といつていい。
「自我」とは快楽を求めるエスと倫理的判断を下す超自我のあいだに位置する心の領域で、現実的調整能力を発揮する「現実原則」に従っている。この表層的な領域でぼくらの日常が無難に営まれることになる。

だれもがそうであるようにエスを超自我で隠匿して自我だけを心の標本として生きてきた岩木さんがふと、自分の欠落に気づいたとき(どうして、人は自分の欠落に気づいたりするのだろうか。気づかなくても生きていけるのに)、馬は姿を見せることなく、「蹄のかたちをした雲がひとつぽっかり浮かんでいる」空を見上げるだけで、欠落しているものであうことはないし、決定的に残酷なのは、なにが欠落しているのかを知ることもない。ただ、欠落しているという思いにとらわれたまま、

ぼくらは短かい生をいとなんでいくのだ。

馬といえば水野るり子さんの『ユニコーンの夜に』（土曜美術社出版販売）も馬が出てくる。

そこははじめじめした春の地帯だ
地面から馬たちが生まれてくる
ふつふつと まくわ瓜が実るように。
かれらがたてがみをゆらすときの
かげろうのようなそのうごき…
わたしの夢の中に入り込み
そのすみずみを通りぬけてゆくときの
ふいごのような生きものの気配
（夢のかたすみに まぎれて
辛いタデ科の草になる馬もあって）
春が押し寄せるときはそんなものだと
わたしは思っていたけれど。

（寝返りしながら
夢の半ばを移動している わたしの
片一方の目には
見知らぬ空き家の灯が映り
片一方の日には ベッドわきで
燃えつきていく蝋燭の火が
ゆれているのだが）。
そこいらじゅうから
草の匂いが立ちのぼってくる窓辺で

列車が一台やってくる
なまなましい…
やみの匂いを
ごうごうと
かきたてながら。

〔列車〕部分

ときおり
一頭のうまがやってくる
ある日はたてがみで
ある日はしっぽで
ある日はみずをのむ音だけで くる
（「みずまわり」部分）
自問自答するわたしに
青葱いろの大気の底から
「なら…あたしを食べて」という声がある
ふりかえると 少女は
ひざのあたりまでつゆに濡れて
秋のきのこになりかけている

〔夏時刻〕部分

（わたしのぬむたいからだの奥で、西の家主がしきりに
生殖している気配がした。家主は釣り上げられた無用
な大魚のようにそこに横たわっていた。目がなかった
だが腹は西空のように熱く染まって、ぶつぶつとつぶ

たよりなげに
ちいさな馬もいないのだ

（あれに…水をやったかしら）
と、わたしは不安だ。

やわらかな樹皮に似た…毛並みの感触、
馬たちのやってくる…その来かたの唐突さ。

大地が毛皮のように波立ってくる…

春の夢には

馬たちの乱れた足あとがつづいている

二度と帰っては来ない 馬たちの

集中の「氾濫する馬」の全篇。水野さんも馬という欠落を抱えている。その馬は「雨の日のかえりみち、通りかかった家になつかしくて、ひさしの下に、傘をかたむけて埋めてきた一個の馬のたまご」（「馬のたまご」）の馬であるだろうし、「旅先で出会ったモクマオウの木陰で見つけた松笠に似た小さな木の実、それはあの夢のなかへ沈んだ馬が、私のために地上に残した一粒の馬のたまご」（「雨のモクマオウ」）の馬でもあるだろう。

だれもが欠落をかかえながらも、自分が何ものなのかを知りたいと願っている。しかし、自分のことはよくわからない。かろうじてわかることがあるとすれば、他者によって語られる「寸断された自己」を自分のなかで統合していくしかないが、つねに統合しそこねて欠落感がともなっている。
自分とは厄介なものだ。

夜の森を

やくように暗い星を吐き出していた。それはあてのな
いひとりごとのようでもあった。）

〔西のうわさ（Ⅱ）〕部分

男性が女性にかなわないことがいくつもあるが、そのなかでも絶対になかないことがあって、それは女性は「産む性」だということだ、この一冊でも、列車や馬といった記号が水野さんにおしよせてくるのだが（フロイトふうに言うならベニスだろう）、水野さんは、「なら…あたしを食べて」と男性性を引き受け、あてのないひとりごとのように生殖する。

岩木さんの「馬」は岩木さん自身の生殖器だろうが、その馬は帰る場所を持たずに天に向かつていなくともある（いかなかない時がほとんどだろうが）。岩木さんは、いや、男は、自分の性を持てあましている。欠落を持てあましている。

先に、水野さんは「馬」という欠落を抱えていると書いてしまったが、それは自分の性を持てあましている男性性からいならぬお節介で、女性性は、「馬」という欠落にたいして「産む性」で（無意識のうちに）対抗している。女性性は、その懐をおおきく広げることだ、欠落を生殖へと転移させるたくましさを持っている（そのたくましさはよくは「想像力」と呼んでいるのだが）。そのことすばらしさがこの一冊に書かれている。